

城山小学校で学んだこと

専修大学松戸中学校 1年

本田 彩佳

私は、この長崎平和大使派遣でたくさんのことを学びました。特に印象に残っていることは、城山小学校で学んだ2つのことです。

一つ目は、城山小学校の正面にある「平和の像」です。「平和の像」とは、城山小学校に通っていた1人の男の子をモデルにした像です。その男の子は、たった一発の原子爆弾により家族を失くしてしまいます。そして男の子は、毎日仏壇に向かいながら「平和」とかいていたそうです。平和の像の下にある「平和」という文字は、当時の字をそのまま彫ったそうです。私はこの話をきいて、平和ということは当たり前じゃないし、昔はいくら願っても「平和」は一步も近づいて来ない、むしろ遠ざかっていたようでした。話をきいているだけでもとても悲しかったです。

二つ目は、城山小学校の校庭にある「嘉代子桜」です。そこにはこんなエピソードがありました。原爆投下当日の8月9日の朝、嘉代子さんは「今日は仕事にいきたくない」とお母さんに言っていました。しかし、あと3日も経てば嘉代子さんの16歳の誕生日だったので、お母さんはその日に休むことを提案します。嘉代子さんはお母さんの提案に同意し、職場である城山小学校に向かいました。しかし、いつも通り仕事ができしたのは11時2分まででした。城山小学校は原爆投下中心地から約500mと近く、1500人もいた生徒や先生のうち、1400人ももの尊い命が一瞬にしてうばわれてしまいました。城山小学校はなぜか、嘉代子さんが仕事をしていた所だけが崩れてしまいました。次の日から嘉代子さんの捜索が始まりますが、崩れていることもあり見つかる気配はありませんでした。何日も探し、とうとう両親は、明日で最後にしよう、と話していました。そして翌日、防空頭巾を被り白骨化した上半身だけの嘉代子さんが見つかります。そこで、嘉代子さんの両親は、このことを忘れないでほしいと願いを込めて嘉代子さんの大好きな桜を城山小学校に贈呈したそうです。一般的な桜の寿命は約60年といわれていますが、この桜は戦後から79年。毎年春になるときれいに咲くそうです。私はこの話をきいて、とても感動しました。なぜなら、嘉代子さんの両親の願いが桜にも届いているから、この桜は一般的な桜の寿命よりも20年近くも長生きしているのではないかと思ったからです。

私はこの長崎派遣で、原爆の悲惨さ、生命の尊さを改めて学び、平和式典に参加したり、たくさん自治体の方々と関わるという貴重な経験をすることができました。今回の派遣で学んだことをこれからの学習に活かし、理解をさらに深めていきたいです。

平和な生活を送り続けるために

松戸市立第二中学校 3年

鈴木 瑠那

昭和20年8月6日午前8時15分に広島へ、8月9日午前11時2分には長崎へ原子爆弾が投下されました。私は原子爆弾が投下された長崎で戦争や平和について深く学ぶことを目的に8月7日から10日までの4日間平和大使として長崎へ派遣されました。

私は4日間の派遣の中で特に印象に残った出来事が二つあります。

一つ目は2日目に行った原爆資料館です。原爆資料館には目をそむけたくないような写真や展示物がたくさんありました。黒焦げの焼死体や駅のホームで亡くなっている母子、背中が焼けただれて背中一面が真っ赤な血で染まった男の子などの写真があり、あまりの悲惨さに言葉を失いました。また、11時2分をさしたままの時計、とけて変形したサイダー瓶や折れ曲がった火の見やぐら、ガラスがたくさん突き刺さった作業衣などからも当時の被害の大きさがうかがえました。一発の原子爆弾によって日常が壊され、大切な人や物が消え去ってしまった悲しみは私には想像してもしきれません。

二つ目は青少年ピースフォーラムでの活動です。青少年ピースフォーラムでは被爆した方のお話を聞いたり、戦時下の生活を疑似体験したりしました。被爆体験講話では被爆当時11歳だった松尾幸子さんが長崎に原爆が落とされた時のことをお話ししてくださいました。松尾さんのお話の中で心に残った言葉があります。それは「愚かな戦争はもう二度としないでください。一日も早く核兵器を無くしてください。」という言葉です。私は実際に被爆した方の強い思いに心が動かされました。現在世界には12000発以上の核があるといわれています。12000発以上の核を全て無くす、ということは難しいかもしれないけど核を使わないようにするための行動は私にもできるのではないかと、思いました。戦争疑似体験では戦時中の生活を実際に体験しているような気持ちになりました。大切な人や物、場所を15枚ほどのカードに一つずつ書いていきます。そして徴兵制や外出制限などで戦況が悪化するにつれて書いたカードを手放します。自分の大好きな人や物を書いたカードを手放したときはとても胸が痛みました。私はたくさんのカードを持っていたましたが、最後には全てなくなってしまいました。戦争疑似体験では音や照明も使って当時の様子を再現します。実際に戦争が起こっているわけではない、ということは理解しているのに、空襲警報の音、原子爆弾が落ちた時の強い光や大きな音にとっても恐怖を感じました。私は戦争疑似体験を通して「戦争の怖さ」を知ってからもう二度と戦争なんて起こしてはいけない、体験したくないと思いました。

多くの方が亡くなった中、奇跡的に生き残った方も後遺症によって苦しんだ

と聞いて私は驚きました。生き残った方は放射線の影響で脱毛や白血病などの原爆症に苦しみました。生き残っても苦しみ続けなければいけないなんてとても残酷だなと思いました。また、被爆者の方は病気だけでなく周りの人からの根拠のない差別や偏見にも苦しんだそうです。原爆爆弾は体だけでなく人の心にも大きな傷を与えたと知り、改めて原子爆弾の恐ろしさを感じました。

長崎派遣を通して私はもう二度と核兵器を使ってはいけないと強く思いました。核兵器を使わないためには私が長崎で学んできたことを多くの人に伝えて、核兵器の恐ろしさを知ってもらうことが一番大切だと思います。また、私は長崎に行く前、毎日が同じような日々でおもしろくないなと思うときが時折ありました。しかし長崎へ行ってから、今が平和だからこそそう思っていると感じました。平和は当たり前ではありません。今自分が置かれている環境に感謝しながら生活していきたいと思いました。

今も世界のさまざまな地域で争いが起こっています。争いを無くすために一人一人が世界中の人を思いやることが大切です。もし何か問題が起きたときは武力ではなく、話し合いで解決することができれば平和へと繋がると思います。また、世界で唯一の被爆国である日本はもっと核兵器の恐ろしさを学び、戦争の悲惨さを、愚かさを世界に発信していく必要があると思います。被爆者の方の経験が無駄にならないように、悲しい思いをする人が世界でいなくなるように、と願っています。

私は長崎を最後の被爆地にするために、原子爆弾の恐ろしさを平和大使として次の世代へこれから語り継いでいきます。